

## 九、図書館および図書・電子媒体等

[到達目標]

本学図書館は、建学の理念に沿った教育・研究方針のもと、教育・研究および学習支援のための図書資料や電子媒体の収集・整備に努めるものとする。目標を達成するための措置として、図書館施設の充実、図書・学術雑誌等資料の体系的収集、利用者サービスの強化、情報発信の積極的展開、電子ジャーナルやデータベースの導入による電子図書館機能の整備充実を図ることとする。

### a. 図書館

#### (図書、図書館の整備)

大学図書館の目的と役割は、大学の教育・研究・開放の諸活動において、主たる利用対象者である学生や教員が必要とする資料と情報を効果的・効率的に提供することを通じて、大学の目的を達成することにある。

大学図書館の基本的業務として教育・研究活動支援があり、また、生涯学習の普及、近隣大学とのコンソーシアムの形成や地域社会への開放などの公共的機能が挙げられる。

教育支援機能は、大学および大学院教育の目的と方法、具体的にはカリキュラムに沿った図書資料を収集・配架・提供することであり、本学図書館は、学部基本図書、指定図書を備え付けることによって教育支援を行っている。一方、学生の人格形成や一般教養のための図書整備には、基本的な図書を定期的に変書・購入している。とりわけ、学生のための開架図書充実に心がけている。

研究者への研究活動支援は、教員の研究分野を全てカバーする資料の整備が望ましいが、近年研究分野の細分化が著しく、すべての教員の要望を満たす資料の収集は、予算的な制約もあり困難である。本学図書館は、図書館運営委員会において学部の均衡を考慮した収書システムをとり、教員の個人研究費でカバーできない資料は分野別予算によって購入し、研究上の要請に応じている。

#### 図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他教育研究上必要な資料の体系的整備とその量的整備の適切性

[現状の説明]

##### 1) 図書、学術雑誌、視聴覚資料数

図書館が所蔵する図書の総数は783,809冊であり、内訳は内国書527,997冊、外国書255,812冊となっている。そのうち開架図書として99,916冊(内国書95,863冊、外国書4,053冊)を、閲覧室に配架している。

雑誌を含む定期刊行物は1,242種(国内書536種類、外国書706種類)を数え、語学用カセット、CD、CD-ROM、DVD等の視聴覚資料は9,373点になっている。

また、過去3年間に受け入れた図書の冊数は、2002(平成14)年度20,855冊、2003(平成15)年度16,288冊、2004(平成16)年度17,716冊であった。

##### 2) 図書館資料の体系的整備

2005(平成17)年3月末現在、日本十進分類法(NDC)により分類した全蔵書冊数に対する各分野の冊数の割合は、総記10.9%(10.7%)、哲学4.2%(4.2%)、歴史6.3%(6.2%)、社会科学47.3%(47.2%)、自然科学3.0%(2.9%)、工業・工学4.4%(4.4%)、産業8.4%(8.8%)、芸術2.0%(1.9%)、言語5.4%(5.6%)、文学8.2%(8.2%)となっており、括弧内に示された2001(平成13)年度の割合とほぼ同様の分布となっている。

##### 3) 図書館資料の選定・収集

図書館資料の選定は、学部・学科・大学院研究科の研究用資料については、それぞれの専門分野の教員が推薦した資料を、各分野から選出された図書館運営委員が選定するシステムになっている。

ただし、高額図書(10万円以上)と和・洋雑誌・新聞は運営委員会で直接、選定、承認される。さらに、シラバスで紹介された教科書・参考書は、ほぼ無条件で選定・収集され、各教員の指定図書コーナーに配架し、学生に提供できるよう収集している。また、学生用図書・参考図書・書誌等については、学生からの購入希望を考慮に入れながら図書館運営委員から推薦された教員と図書館員とで構成された選書委員会で選定を行う。教員研究室用資料の選定は、各研究者が定められた予算枠内で研究・教育の必要に応じて行う。なお、2004(平成16)年度からは、分野別予算・決算とし、分野別に選出された運営委員が、責任を持って選書・選定を行っている。

#### 4) 図書館資料の量的整備・保存

図書館資料の保存に関しては、劣化対策、保存対策として、地下書庫およびマイクロ室に除湿機を設置し、貴重図書は稀覯書室を設けて適度な温湿度を保つ工夫をしている。図書、学術雑誌の紛失や破損等については十分なチェックを行い、その都度補充、修理をし、雑誌については欠号補充をしている。また、書庫の狭隘化も視野に入れ、重複している雑誌や過去のテキスト類で利用に適さないもの等の廃棄(除籍)処分を適宜行っている。

#### [点検・評価] [長所と問題点]

##### 1) 図書館資料の選定・収集

図書資料の選定にあたっては、教員(研究者)の協力を得て大学の教育・研究方針にそって行っているが、基本的に教員の購入依頼に基づいているため、ある程度の偏りは避けがたい。毎年度の図書受入冊数は過去3年間の平均で18,000冊を超えて収集しているが、前回の平均23,000冊より減少している。教育・研究用としての利用に適する図書資料は質量とも整備され、全般的に充実が図られている。学生の教育用図書についても充実され、指定図書の毎年度の収集冊数が、1995(平成7)年度以降、それまでと比較して4~5倍と大幅に増加したことは評価できることである。

一般的な資料については分野によっては収集が著しく少なく、分野別の収集割合では自然科学分野が3.0%、特に芸術関係は2.0%で収集の偏りがあるが、社会科学が47.3%と高い割合を示しているのは学部構成の結果の反映であり、やむをえないところであろう。

参考図書は年鑑等を含めて各専門分野にわたって6,843冊を開架図書として配架している。新版や改訂版は速やかに購入し適切に利用者に提供していることも評価できる。

蔵書構成に関しては、雑誌を含む定期刊行物のタイトル数が2,860種、そのうち学術雑誌が約2,150種で、大学、大学院の教育・研究内容にそったものがほとんどであり、バックナンバーも適宜購入している。

新聞は国内主要新聞、地方新聞はもとより外国新聞も含めて約60種と多数を購読している。定期刊行物の整備状況は体系的、利用的に良好である。

マイクロ資料、ビデオテープ、CD-ROM、DVDなどについても利用者の要望に応えうる質と量を維持しているが、それら資料を収納するためのマイクロ資料室、利用のためのマイクロリーダー・プリンターの設置や、AVコーナーの設備の整備状況としては、施設の狭隘化から必ずしも十分とはいえない。

近年、学術情報が氾濫気味である現状の下、予算やスペースの制約も考慮すれば、あらゆる文献資料を収集することは不可能に近い。限られた予算で分野毎にバランスのとれた蔵書構成を実現できるよう配慮した方法を採用していることは評価できる。蔵書構築については、幅広い調和のとれた蔵書を目指し、学部・学科・大学院の教育・研究の目的に添った資料収集となるよう配慮している。

しかし、一方では増加の一途をたどる定期刊行物の保管スペースの狭隘化が問題視されており、新聞等の消耗図書は一定期間の保存後廃棄しているが、主要新聞はマイクロフィルム、縮刷版等で長期保存している。定期刊行物のうち、洋書については可能なかぎり電子ジャーナルに切り替えて行くことが望ましいが、学部・学科のコア・ジャーナルは冊子保存としたい。

所蔵スペースの狭隘化に伴い、資料保存については多数にのぼる重複資料の除籍を適宜行い、問題点の一部解消としている。

#### [将来の改善・改革に向けた方策]

##### 1) 図書館資料の選定・収集

資料選定に関しては、2000(平成12)年11月に「松山大学図書館資料収集の基本方針と選択基準」を確立した。これにより、バランスのとれた資料構成を実現し、本学の個性豊かなコレクションの収集を進める。また、専門的能力の高い職員、各種出版情報や書評に通暁した図書館専門員を配属することにより、新刊図書資料の選定機能の向上を図る。効率的に図書館機能を発揮するために、他大学との相互利用を活発化させることも有効であり、とくに近隣の図書館とは協力を強め、各図書館が分野別に分担して資料の収集・提供を行うなどの方法も考えられる。また、増加する一方の学術雑誌については、定期的に行っている専門分野ごとの種類、冊数の見直しを継続的に実施する。

資料収集については、今後の厳しい財政事情に鑑み、資料の用途・範囲を明確にし、図書予算のより効率的な運用に努める。また、図書館開放を社会的責務として認識し、市民の利用評価などを踏まえて明確な方針を設定して対応しなければならない。

##### 2) 図書館資料の量的整備・保存

書庫内の資料の配架については、書庫の構造上、抜本的な改善は難しいが、初心者にも利用しやすい改善が求められる。なお、将来の蔵書増加予想に基づいて、書庫の収容能力を向上させるとともに、書庫内の管理が容易にできるような実施プランを立てている。

図書館資料除籍規程により、重複している紀要、雑誌、不要と思われる図書の廃棄処分を定期的に行っているが、さらに効率的に実施する。

総合研究所、AV室が所蔵管理している資料については、図書館、総合研究所がそれぞれ目録データの作成、管理を行い、学内に分散している図書資料のデータを一元化していることを生かして、利用者の一層の便宜を図る。

## 図書館施設の規模、機器・備品の整備状況とその適切性、有効性

### [現状の説明]

#### 1) 図書館施設の規模

現図書館は本学創立50周年記念事業の一環として建築され、1976(昭和51)年3月に竣工した。その後、1996(平成8)年3月には閲覧・地下書庫スペースを増築し、閲覧座席数、開架図書冊数、書庫収容能力等中四国の大学図書館の中でも有数の規模を持つ図書館となった。図書館の規模は次に示すとおりである。

- ・構造：鉄筋コンクリートおよび鉄骨鉄筋コンクリート造地上5階・地下2階建

- ・延床面積：7,283 m<sup>2</sup>

(詳細) 1階：1,876 m<sup>2</sup>、2階：1,664 m<sup>2</sup>、3階：429 m<sup>2</sup>、4階：374 m<sup>2</sup>、5階：95 m<sup>2</sup>、

地下1階：1,084 m<sup>2</sup>、地下2階：1,761 m<sup>2</sup>

- ・用途別面積

サービススペース

閲覧スペース：2,241 m<sup>2</sup>、視聴覚スペース：232 m<sup>2</sup>、情報端末スペース：46 m<sup>2</sup>、その他：304 m<sup>2</sup>

管理スペース

書庫：2,444 m<sup>2</sup>、事務スペース：548 m<sup>2</sup>、その他：1,468 m<sup>2</sup>

・施設

総閲覧座席数：770 席

(内訳) キャレルデスク(2階 60 席)、読書指導室(2階 30 席)、ビデオブース 8 席、オーディオブース 12 席、ブラウジングコーナー 18 席、グループ学習室(2階 4 室 40 席)、マイクロリーダー室、マイクロ室、AV 室 40 席、教員閲覧室(3階 2 室、4階 2 室)ほか

・資料収容能力

書庫収容能力：83 万冊、開架図書収容能力：17 万冊

・設備

入館管理システム、ブックディテクションシステム、電動集密書架、館内放送設備、冷暖房、地下書庫除湿設備、エレベーター、ダムウォーター、サインを備えている。

## 2) 機器、設備の整備状況

図書館施設を有効かつ適切に利用し、その機能を最大限に引き出すためにも、機器、備品の整備は、大学図書館にとって欠くことのできないものとの認識を基に整備を行ってきた。

情報機器はもちろん照明、冷暖房、空調設備についても十分な配慮をしている。主な機器、備品の整備状況は次に示すとおりである。

・情報機器関係

図書館システム：DB Server 1 台、Web Server 1 台、WindowsXP クライアント(利用者検索用)：34 台(学外者用 2 台を含む)、WindowsXP クライアント(業務用)：35 台、CD-ROM 検索パソコン：3 台

・マイクロ機器関係

マイクロリーダー・プリンター：2 台

・文献複写関係

文献複写機 利用者サービス用：3 台、図書館業務用：3 台

・AV 機器関係

オーディオブース(一人用)：12 台、ビデオおよびLD、DVD ブース(一人用)：8 台、MDプレーヤー：2 台

## [点検・評価] [長所と問題点]

### 1) 図書館施設の規模

図書館は、緑の木々に囲まれた静かな場所で本校地のほぼ中央に位置し、教育、研究ゾーンとの位置関係も良好である。延べ床面積は 7,283 m<sup>2</sup>、閲覧座席数 770 席、開架図書収容能力 17 万冊、書庫収容能力 83 万冊をもつ。図書館施設の規模は、利用者(学生 5,500 人、教職員数 250 人)、蔵書数(図書約 78 万冊、定期刊行物約 2,900 種)から考えて、学習・研究・保存という大学図書館機能を効果的に発揮するのに現在のところ十分であるといえるが、近い将来に施設の狭隘化が予測され、図書館の増築が期待される。図書館内は全体的に明るく、静かな環境が保たれており、学習環境は良好といえる。

サービススペースは機能的に配置され、1 階には閲覧スペース、サービスカウンター、新聞コーナー、雑誌コーナー(雑誌架は 2004(平成 16)年リプレイスした)、参考図書コーナー、ベストセラーコーナー、推薦図書コーナー、AV コーナー、マイクロリーダー室があり、各コーナーおよびマイクロリーダー室につい

ては、利用者からも有効に利用され、好評を得ている。2階には、閲覧スペース、書架スペースを有し、読書指導室(30席)、グループ学習室(4室40席)、AV室(40席)が配置され、有効に利用活用されている。照明、冷暖房空調等の設備は完備されており、定期的な点検、整備により、快適な環境の維持に努めている。また、地下書庫にも除湿設備を設置し、毎日定期的に温湿度調査をし、資料の保全に配慮している。また、バリアフリーにより高齢者・身体障害者への配慮も十分になされている。

グループ学習室は2階に4室設置され、共同研究等に利用されている。図書館内では会話が制限されるので、独立した部屋があることは望ましいが、まだ空室の時間も多く、一層の利用を促進する必要がある。

## 2) 機器、備品の整備状況

図書館システムとしてのデータベースを構築し、ネットワーク上で利用者のサービスに対応しているが、機器、備品の性能、環境整備を行うことが、図書館業務の向上に大きく影響を与える。

情報機器関係では、利用者用PC 34台(学外用用2台を含む)、業務用端末35台、CD-ROM接続用パソコン3台が図書館サービスと基盤業務の支えとなっている。マイクロ機器関係はマイクロリーダー・プリンターを2台設置し、文献複写関係では利用者サービス用コピー機を3台、業務用を3台設置して利用者の要求に対応している。また、AV機器関係もオーディオブース12台、ビデオおよびLDブース8台を配備し、視聴覚サービスに備えている。

### [将来の改善・改革に向けた方策]

図書館施設は、1996(平成8)年3月の増築時に利用環境スペースを見直し、その後も利用者の利便性に応える環境づくりを心がけ、現在の利用状況では十分なスペースが確保されているが、さらなる利用促進を図るためには、図書館見学を充実させる必要がある。

また、図書館を取り巻く情報化に対応するために、2004(平成16)年度に図書館情報システムのハード・ソフト両面の再構築を実施した。利用者からの情報端末を使用できる環境を求める要望に対応するために、無線LANによって使用できるよう2002(平成14)年度には整備工事を実施し、図書資料を利用しながらのレポート作成やインターネットを介しての情報検索に対応できる環境ができています。大学の方針によるPC必携化により、PCを利用する学生が増加しているため、PC利用者と一般利用者の閲覧席を分離し、PC利用者ルームなどを設ける必要がある。

## 学生閲覧室の座席数、開館時間、図書館ネットワークの整備等、図書館利用者に対する利用上の配慮の状況とその有効性、適切性

### [現状の説明]

#### 1) 学生閲覧室の座席数・開館日・開館時間

学生閲覧室は4フロア(1階から4階)合わせて7,283㎡の面積に656席を有し、グループ学習室4室40席、読書指導室30席、AV室40席を有している。

休館日は日曜日、国民の祝日、開学記念日、年末・年始休業日、夏季・春季休暇中の土曜日の約100日であり、年間総開館日は260日以上となっている。

開館時間は平日(月曜日～金曜日)は午前9時から午後10時まで、土曜日とも平日と同様に午前9時から午後10時まで開館している。ただし、夏季休暇期間は午前9時から午後4時、冬季・春季休暇期間は午前9時から午後5時、冬季期間中の土曜日は休館となっている。

#### 2) 利用者へのサービス

閲覧室には図書約 10 万冊、雑誌 1,242 種(和雑誌 536 種、洋雑誌 706 種)、AV 資料 9,373 点を開架資料として利用に供している。

#### ・資料の貸出

資料は、稀観書、参考図書、AV 資料、新聞、雑誌等定期刊行物を除いてほとんどの資料を貸出している。貸出冊数と貸出期間は、本学学生へは 5 冊以内・2 週間、本学大学院生へは 30 冊以内・3 ヶ月、卒業生・他大学学生には 3 冊以内・2 週間、卒業論文の作成のための利用である場合は特別貸出期間(1 ヶ月)を設け、利用者のニーズに応じている。なお、貸出し中の資料については予約制度を設けて利用者の要望に沿っている。

#### ・配置

資料の配置については、利用者のニーズ、利用統計を参考にし、1 階には辞書・辞典、年報・年鑑、白書、和・洋雑誌、新聞、視聴覚資料、ベストセラー、推薦図書を、2 階には一般図書を、3 階には一般図書および学部基本図書を、4 階には指定図書、資格試験関係図書を配置している。

#### ・文献複写

図書館が所蔵している資料の文献複写については、著作権の範囲内でサービスをしている。複写機は地下 1 階に 1 台、1 階に 2 台設置している。

#### ・学外者への図書館開放

愛媛県内の大学、短期大学、高等専門学校から成る「愛媛地区大学図書館協議会」を組織して相互に利用協力を行っている。また市民へも開放を行っており、2005(平成 17)年度からは市民への貸出サービスも開始した。

#### ・ガイダンス

利用者ガイダンスとしては、演習単位で全学生を対象に図書館利用ガイダンスを行っている。新入生は主に 4 月から 6 月の間となる。また、大学院生、外国人留学生、新任教員に対してもガイダンスを実施している。

### 3) 図書館ネットワークの整備等

館内、館外への OPAC サービスを提供している。教員へのサービスとして図書館ホームページでのオンライン発注システムを構築した。2004(平成 16)年度に和書、2005(平成 17)年度に洋書の新刊検索・発注システムを構築し、教員の利用に供している。また、資料の選書、選定、分野別発注状況、個人研究費執行状況等がオンライン利用できるようにしている。

情報検索として、図書館において各種 CD-ROM による検索が可能な環境を提供する一方で、商用データベースについて更なる充実を図っている。

#### [点検・評価] [長所と問題点]

##### 1) 学生閲覧室の座席数・開館日・開館時間

閲覧室については、1996(平成 8)年度の図書館増築時の構想のなかで十分な検討を加え、利用者の動線を考慮に入れたサービスカウンターや閲覧スペースを確保し、コーナー毎の書架スペースに工夫を加えてきた。また、1 階から 4 階まで、図書・資料の種類、内容に応じて機能的に座席を配置している。利用者数約 5,500 に対する 770 の座席数は過不足無く、図書館閲覧座席数が全学収容定員の 10%を超えており快適な利用環境を維持している点は評価できる。

開館時間は、月曜日から金曜日は午前 9 時から午後 10 時まで、土曜日でも午前 9 時から午後 10 時まで延長している。さらに、利用者からは日曜開館の要望があり、現在、前向きに検討中である。

## 2)利用者へのサービス

図書館資料の提供については、所蔵しているすべての資料をいかにして利用者に有効・適切に提供するかという配慮を常日頃から心がけ、貴重資料、視聴覚資料、参考図書を除いた資料を貸出の対象としている。また、教員研究室の図書も可能な限り学生に貸出をしている。

貸出のできない参考図書、雑誌等定期刊行物については、文献複写サービスを充実させることにより、カバーしている。レファレンス、資料調査に関しては、情報検索、文献紹介、所蔵文献調査等のサービスはもちろん、相互貸借専門の係を配置し、学外資料の提供についても丁寧なサービスを行っている。

近隣大学とのコンソーシアムの形成については、愛媛地区大学図書館協議会の申し合わせにより、県内他大学の学生・教職員の相互利用が可能となっている。

地域社会への開放としては、1977(昭和52)年9月より松山市民および市内に勤務する人達を対象に、図書資料の閲覧に供していたが、2005(平成17)年より、松山市民への貸出を開始した(3冊・2週間)。

## 3)図書館ネットワークの整備等

図書館ネットワークが整備されたことによるシステム機能の充実、機器の操作性の向上は、情報検索関連面での利用者サービスを大幅に向上させた。蔵書区分(ALL, 図書館、総合研究所)、検索区分(図書、雑誌、雑誌特集記事)、和洋区分と、タイトル、タイトルの一部、著者、キーワード、NDC分類、ISBN、ISSN、および出版年の検索項目でどこからでもアクセスできる検索機能と、国内外のCD-ROMを多数所蔵し、また商用データベースの利用により、雑誌記事、新聞記事、法令・判例、辞書・辞典、百科事典等の検索、内容の閲覧が容易に利用でき、教育・研究支援に大いに役立っている。

## 4)図書館の利用状況

図書館の利用状況は、過去3年間の入館者数、貸出冊数とも減少しており、単なる学生数の減少のみとは思えない何らかの原因が考えられる。利用者減少の原因究明は「アンケート調査」の実施などで利用者のニーズを知る必要がある。また、学生の読書推進を図るために図書館が設けている書評賞制度を推進するなど、一層の利用促進を図るとともに、より積極的な利用者サービス展開を心がけたい。

### [将来の改善・改革に向けた方策]

以前より利用者からの要望として出されていた夜間の開館時間延長は、従来の午後8時を、2003(平成15)年度以降午後10時まで開館することで対応している。なお、日曜日開館については、図書館としての対応方法(アウトソーシングを含めて)を早急に方向づけたい。

利用者サービスは、図書館側で企画する新入生ガイダンスだけではなく、学生、教員からのアンケート結果に基づくサービスを心がける。図書館利用の基本的ガイダンスから、具体的な文献利用の方法、検索方法へと、段階的にガイダンスを実施して行きたい。

特に、情報端末を介しての利用者ガイダンスは、利用者からの要望も取り入れてその内容を工夫し、年間を通じてガイダンス回数を増やしていく。

また、利用者のプライバシー保護を考慮して自動貸出機の設置を検討している。

## 図書館の地域への開放の状況

地域社会への開放としては、1977(昭和52)年9月より松山市民および市内に勤務する人達に対して、図書資料の閲覧に供していたが、2005(平成17)年度より、松山市民への貸出を開始した。3冊を限度に2週

間の貸出を実施し、そのサービス内容を向上させた。

[点検・評価] [長所と問題点]

松山大学図書館は、1977(昭和 52)年から地域開放しているが、従来は図書資料の閲覧のみであった。2005(平成 17)年度より、松山市民への貸出を実施したことにより、利用者から評価を受けている。

図書館の市民利用状況

年 度	閱 覧 者 数													閲 覧 冊 数
	利用者数	性 別		年 齢 別					職 業 別					
		男	女	20代	30代	40代	50代	60代	会社員	公務員	教員	その他	無職	
2000年度	1,248	1,129	119	126	437	323	26	336	80	10	20	341	797	2,426
2001年度	1,374	1,245	129	320	336	332	46	340	155	27	18	552	622	4,882
2002年度	1,085	945	140	250	169	317	55	294	176	26	6	344	533	3,846
2003年度	1,150	970	180	235	307	225	44	339	162	33	4	580	371	3,118
2004年度	896	752	144	235	180	132	30	319	80	51	8	320	437	2,535

[将来の改善・改革に向けた方策]

現状は松山市民および市内に勤務する人達に限定しているが、当該地域以外の在野の研究者への開放を視野に入れた更なる地域貢献を検討したい。

**(学術情報へのアクセス)**

**学術情報の処理、提供システムの整備状況、国内外の他大学との協力の状況**

[現状の説明]

1) 学術情報の処理、提供システムの整備状況

本学図書館は1990(平成2)年10月にサーバによる図書館基本システムを導入し、蔵書目録データベースの構築が進められてきた。研究室等からは1997(平成9)年4月以来、学内LAN経由でWeb版OPACによる蔵書検索を可能とした。その後、2004(平成16)年には図書館システムをリプレイスし、より多くの図書館利用者が館内で利用できるようOPAC端末を増設し、28台を図書閲覧室1~4階に設置するなど、システムを含めた再構築を行った。また、業務端末のパソコン化、学内LAN、インターネット、基本ソフトやLINUS固有のKeySQLを使った文書作成処理等、図書業務の処理能力のアップに繋がった。

大学のホームページでは、図書館ホームページが刷新され、各種手続や検索方法、開館スケジュール等の利用案内情報も加えられている。

図書の発注、整理のための図書館情報システムは、国立情報学研究所と接続し、新NACSIS-CATを利用したデータ構築を行っている。雑誌管理システムについても、カレント情報のOPAC表示が可能となるようシステムを再構築した。

また、資料の電子化に伴い、教育・研究に必要な外部データベースは、以下のオンラインデータベースと契約し、インターネットで随時情報が得られる環境となっている。

- ・聞蔵(朝日新聞記事全文検索)、日経テレコン 21、ヨミダス文書館(読売新聞記事全文検索)、毎日 News

バック(毎日新聞記事全文検索)、日経BP記事検索、Web MAGAZINPLUS、LEX/DB インターネット、OCLC First Search、Japan Knowledge、Oxford Dictionary of National Biography、MLA International Bibliography、Linguistics and Language Behavior Abstracts、Hein-On-Line、Swetswise

雑誌については、冊子体から電子ジャーナルへ全面的に切り替えることは、バックファイルの蓄積という点での不安があるが、ジャーナルのバックナンバーの保存や、利便性を考慮すれば、冊子体から徐々に電子ジャーナルに切り替えて行くことが望ましい。冊子体は、必要最小限におさえるべきだろう。

また、CD-ROM による検索サービスの主だったものは以下のとおりである。CD-ROM から資料形態が Web へ移行しつつあり、Web 上でのデータベース検索が一般しつつある。従って、CD-ROM の購入点数は減少している。

・OED、世界大百科事典、Encyclopedia Americana、法令判例体系 CD-ROM、電子版現行法、法律判例文献情報 CD-ROM

## 2) 他大学図書館との相互協力状況

国立情報学研究所の NACSIS-ILL を利用して、他大学等と図書資料の複写依頼・受け付け処理、図書の現物貸借の依頼・受付処理を行っている。NACSIS-ILL を利用することにより、相互貸借利用は飛躍的に伸びた。私立大学の一部を除けば ILL 制度は完備している。

大学以外の機関は、国立国会図書館への貸出し依頼が圧倒的に多い。地域資料等は公共図書館との相互協力を行っている。

### [点検・評価] [長所と問題点]

#### 1) 学術情報の処理・提供システム

利用者用情報端末の導入は、学生自身による蔵書検索の利便性・効率性を飛躍的に向上させ、学生の図書館利用促進に大きく寄与している。

図書館システムについては、NACSIS-CAT の導入により受入・整理業務の省力化・効率化が図られ、発注・受入・会計処理・整理・配架・貸出・蔵書検索・レファレンスまでを含めた、トータル・システムとしての事務システムの構築ができています。今後は、図書館情報システムと、現在、構築中の新事務システムとの連携について、検討が必要である。

また、2004(平成16)年度からは「オンライン選書システム」を構築し、教員が図書館学内専用のHPから発注依頼することを可能とした。選書のデータベースとして、和書は日販MARC、洋書はIngramをサーバに常時12万件以上取り込み、新刊情報を提供している。和書は毎週更新、洋書は月1回更新し利用者に供している。この「オンライン選書システム」は、全国の大学図書館では先進的取り組みとして評価されている。

## 2) 他大学図書館との相互協力状況

海外への貸借依頼制度は存在するが、業者任せになっている。さらに、海外の図書館に教員が赴くときには、紹介状を発行している。国内他大学への文献複写依頼はILLによって十分機能している。

### [将来の改善・改革に向けた方策]

#### 1) 学術情報の処理・提供システム

- ・図書館新システムの稼働

NII の新 CAT-ILL システムへの対応が可能なシステムとして、2004(平成16)年4月、日本電子計算の

LINUS/EXに変更した。また、新CAT-ILLへの移行にともない書誌フォーマットをNII方式に切り替えた。学内で構築されつつある「新事務システム」との連携による「情報流通」によって、利便性の向上が期待される。

- ・図書館ホームページを通じたサービスの充実

今後の情報リテラシーを勘案すれば、図書館が授業を積極的にサポートできる体制をとることが期待されている。OPAC検索からNACSIS-Webcatへのリンク検索の可能性、さらに、雑誌記事索引(WebMAGAZINEPLUS)の検索結果から本学OPACへのリンク、ILLへのリンク等をHP上で構築して行く必要がある。

- ・外部データベースの更なる充実化

2005(平成17)年現在、和書データベース8点、洋書データベース9点のサービスを提供している。有効な外部データベースの導入をさらに進めることが必要である。2006(平成18)年度開設の薬学部では、外部データベースや、電子ジャーナルの利用契約を進捗させている。

- ・コンテンツのデジタル化

本学図書館の個性化・差異化を図るためにも、本学所蔵の稀覯書や古文書等、本学固有コレクションのデジタル化を進めなければならない。

- ・電子ジャーナルの導入

2005(平成17)年現在、雑誌については、学部構成(人文・社会科学系)から、すべて冊子を優先して購入している。しかし、2006(平成18)年4月の開設される薬学部への対応や、今後の私立大学コンソーシアム利用を考えれば、早急に冊子体から電子ジャーナルに切り替えることが望ましい。そのために既存学部で必要とするコア・ジャーナルを特定する等の作業が急務である。

## b. 総合研究所

### (図書・図書館の整備)

#### 図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他教育研究上必要な資料の体系的整備とその量的整備の適切性

##### [現状の説明]

本学教員の学術研究活動の奨励・助成・支援および関連業務を担う総合研究所は、その主要業務のひとつとして研究・調査資料の収集を行っている。総合研究所における研究・調査資料収集の主たる対象は他大学の発行する紀要類であり、その数は約1,500種に及んでいる。また、統計書・年鑑などの定期刊行物の購入などのほか、学術交流大学からの寄贈資料、県内自治体などからの寄贈資料の受入も行っており、これらを合わせた総数は2005(平成17)年時点で20万冊にのぼる。これらの資料については受入・整理のみならず貸出も行っている。とりわけ、地方自治体からの寄贈図書は地域固有の資料であり、他の機関では収集していないものが含まれており、この点においても図書館の有する資料との差別化が図られている。

##### [点検・評価]

統計・年鑑等の定期購読分については継続的な購入が長年にわたりなされているために、バックナンバー等の整備は十分に行われているものの、自治体関係の寄贈分については欠号も少なくない。また、書庫の収容能力が不足している上、資料の収集・管理を担当する職員が配置されていないことから、資料収集とその管理が適切に行われているとは必ずしも言えない。

##### [将来の改善・改革に向けた方策]

今後、収集資料について図書館に一元化することも含めて図書館との役割分担をより明確にするとともに、書庫の増築など、早急に対策を図る必要がある。特に、地域の大学として県及び市町村の行財政デー

タ、地域産業に関するデータの整理と自治体職員などへの利用の便宜を提供するために環境を整備する。

### **図書館施設の規模、機器・備品の整備状況とその適切性、有効性並びに学生閲覧室の座席数、開館時間、図書館ネットワークの整備等、図書館利用者に対する利用上の配慮の状況とその有効性、適切性**

#### [現状の説明]

上記の通り、総合研究所は2005(平成17)年3月末現在約20万冊の図書を所蔵している。その内訳は定期購読図書・雑誌・統計資料、新聞、教員研究費による購入図書、寄贈図書からなり、図書・雑誌は年間約6,000冊増加している。また、書庫は2005(平成17)年現在244㎡である。

#### [点検・評価]

総合研究所の図書および資料の主要な利用者は教員であり、一部に大学院生および学生の利用がある。このため、研究所全体の設備不足もあり、資料閲覧のための閲覧室を設けていない。書庫は老朽化しており、図書の適正な保管に必要な空調設備も不十分である。収容能力が不足しており、図書・資料の適正な管理ができているとは必ずしもいえない状況にある。また、雑誌配架のためのスペースも不足している。

#### [将来の改善・改革に向けた方策]

研究所としての機能を強化するには、閲覧室の整備、雑誌配架のためのスペース、書庫の増築が必要不可欠である。また、図書館との機能分担関係を明確にし、将来図書館の増改築がされる場合には、研究所の整備と合わせて整備する必要がある。

### **図書館の地域への開放状況**

総合研究所収蔵の図書についても地域住民の閲覧要請に応えることができるように規程の整備を行い、2005(平成17)年、図書館と同様の貸出規程を策定した。

### **(学術情報へのアクセス)**

#### [現状の説明]

本学の研究成果である学術情報については学術雑誌および刊行物を通じて発信し、全国の大学・研究機関との間で学術刊行物の交換を行っている。

#### [点検・評価]

学術情報の処理・提供システムについては現在大学全体で進められている新事務システムの一環として整備される予定である。

#### [将来の改善・改革に向けた方策]

現在進行中の新事務システムが完成すれば、学術情報の処理・提供システムが改善されるものと期待されている。